



媚薬ざ〜めん!

「よーし出席取るぞー！  
相原〜！」

「…は、はい」

「んん？  
声が小さくて聞こえんぞお！  
もう一度、相原！」

「んっ…あっ……はっ、はあ…  
上手く…声が……！  
あっああん！」



「ほれどうした？  
しっかり声を出さんかい。  
マンコはこんなに力んで  
締め付けてくるといふのに」

「はっ、はあ…あっああ…!!  
駄目えええ…!!  
んっ、あっあん！」

「早く返事しないと  
先生イっちゃまうぞ？  
朝っぱらから中に  
出されたいのか？  
ん？」



「嫌あああああ！  
中に出しちゃ駄目えええええ！  
ちゃんと返事しますからあ……！」

「わかった。  
じゃあ、相原！」

「んっ……あっ……！！  
はっ……はい！！  
……はあっはあ」

「よし、いいぞ。  
だが時間かかりすぎだ。  
先生もう我慢できん！  
……うっ！」





「ガマン汁も、こぼさずちゃんど飲めよ？  
じゃないと机が汚れちまうぞ」

ちゅっ、つうっ、つうっ……

んっ

んんっ

「あー、亀頭の先が吸われて……  
うっっ……駄目だ。  
このままイきそうだ！」



「体育の授業始めるぞ！  
まず準備運動だ。  
女子はマットの上で股広げろ」

(ふええ、この恰好  
恥ずかしいよお…)

ぽかぽか♡





「ペアの男子は  
女子のマンコよくほぐしてやれえ！」

「あっ……！ いやあああ！」

「よし、じゃあ挿入れるよ佐伯さん。  
んっ…おっおっおっおっおっおっ！  
佐伯さんのおマンコやわらけえ！」

「あっ……！ だ、駄目ええええええ！  
いきなりっ…深いよおっおっおっおっ！」

ヌヤッ

びゅん

ゴーン

「奥までしっかりほぐさないとね〜」

「あっああん！  
駄目ええええええええええええ！  
そんなに激しく突かないでええ！」

「おっ、佐伯さんのマンコ  
良い具合にとろっとろに  
なってきたぞ。  
…うっ、俺ももう限界だし…」







「お願い!!  
トイレ先にさせてよお!!」

「悪い悪い、俺も我慢できなくて  
すぐ済ますから…  
あー下半身力んで丁度いい膣圧」

「あんっあん!! 駄目え!!  
漏れちゃうってばあ!!」

びん  
びん

パニッ

ズッ

ズッ



「あーすげえ気持ち良い…  
なかなかやめられないわ。  
お、小便より先に  
いやらしい汁が流れてきたぞ」

「あんっああん！  
そんなに激しく突いたら  
あ、あああああああ  
駄目ええええ…！！  
もう限界だよおおおおお！！」

ブルブル

ブルブル

ズッ

ズッ

ズッ





「ほら、もっと腰を振れ！  
そんなんじや全国大会で勝てないぞ！」

「は、はい……！」

「俺のチンポの動きに合わせてろよ！  
おらっ、行くぞ！ ふんっふん！」

「あっ、だ、駄目ええええええええ！  
そんなに激しく突き上げちゃ…  
あんっあんっああん！」

ズ  
ッ

ズ  
ッ  
ッ



「笑顔も忘れるなよ！  
本番ではお客様をお前の  
ドスケベな姿で楽しませるんだ！」

「は、はひ…。  
笑顔、笑顔…！」

「よし、いいぞ！  
膣の締まり具合も最高だ！  
…うっ、俺もそろそろイきそうだ。  
このまま中に出すぞ！」





「水野、お前またタイム更新できなかつたのか!」

あん

あ

ちゅちゅ

ズポ

ズポ

「す、すみません先輩!  
明日は必ず…  
だから、もう…こんなこと  
やめっ…!」

「駄目だ。まだペナルティーは  
終わってないぞ!  
ほらもっと腰動かせ!」

「あつ、だつ…駄目！  
硬いものが奥に当たって…！  
これ以上もう無理だよお！」

あ、

ちゅちゅ

あん、

「そんなこといって  
アソコびしょびしょにして  
感じてるじゃねえか！  
乳首もおっ立たせやがって。  
そのスケベな体にザーメン  
ぶちまけてやる！」

ズポ、

ズポ、

「ひっ…やだあ…！  
やめてええええ…！」





「水野、お前またタイム更新できなかったのか!」

あんっ

あ、

ひゅんっ

ズポッ

ズポッ

「す、すみません先輩!  
明日は必ず…  
だから、もう…こんなこと  
やめっ…!」

「駄目だ。まだペナルティーは  
終わってないぞ!  
ほらもっと腰動かせ!」



「あつ、だつ…駄目！  
硬いものが奥に当たって…！  
これ以上もう無理だよお！」

あ、

ひゅん

あん、

「そんなこといって  
アソコびしょびしょにして  
感じてるじゃねえか！  
乳首もおっ立たせやがって。  
そのスケベな体にザーメン  
ぶちまけてやる！」

ズポッ

ズポッ

「ひっ…やだあ…！  
やめてええええ…！」







「あつ、嫌あ！  
離して下さいー！」

「全校生徒のために身を尽くすのが  
生徒会の役目だろ？  
チンポの世話くらいしてくれよ」

「そ、そんなこと私…  
あんっ…！！  
だ、駄目え！ あっああん！」

「エロい声で鳴きやがって。  
真面目そうに見えて、  
スケベな女だぜ！」

ズ  
マッ

ズ  
ポッ

ズ  
ン  
ン



「おらっ、ここがいいんだらう？」

「あっ、ああん！  
お願いだからもうやめて下さ…  
んっ、ああ！」

「そんなこと言って  
アソコがグシヨグシヨだぜ？  
本当は気持ち良いんだろ？  
生徒会長さんよお？」

「そ、そんなことはありません！」

ズ  
ポッ

ズ  
ポッ

ズ  
ポッ

「へえ、会長さんは  
もっと激しいのがお好きかい？  
…なら、これでどうだ！」

「やあああああああああ！  
そんなに激しく突いちゃ駄目ええええ！」

「はあはあっ、俺ももう  
いきそうだ。  
よし、このまま中を出すぞ！」

「だ、駄目え！  
中に出さないでえ！」

ズカッ

ズポッ

ズン





「おらっ、どろっどろの濃いザーメン  
たっぷり注いでやる！」

「嫌あああああああああああああ  
体の中に熱いのが  
入ってくるううううううう！」

ビクッ

ビクッ

「エッチに不慣れな新入生は  
居残りセックスで上手になろうね！」

「ほらっ手休めないで  
もっとチンポ扱いて！」

「おおっ、まだきつきのマンコ。  
気持ちいいぜ〜！」

ヌヤッ

プルッ

ん

ん



「ああ、いいよ。その舌使い。  
うあっ…気持ち良い…」

「あー、可愛い手つきで  
シコシコされるのたまらん」

「へへっ、アソコも良い具合に  
とろけてきたぜえ」

ヌヤッ



「うっ…俺、もうイきそうだ！」

「俺も……！  
あー、すげー出る」

「ふう…、まだまだ下校させないぜ。  
放課後もたっぷり可愛がってやる」

































































